

2025年7月27日 主日礼拝 聖霊降臨節 第8主日 週報番号3474号

説教題： 「わたしたちの願う平和・キリスト」

聖書箇所：マタイ福音書10：5-15(17頁) エフェソの信徒への手紙2：11-17(354頁)

説教者：明星晃牧師 招詞：ヨブ記1:21 交読詩編：97編1-8節(107頁)

讃美歌：83(聖なるかな)／206(七日の旅路)／470(やさしい目)／510(主よ、終わりまで)

「今週の聖句」(その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々が)それを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる」(マタイ福音書10:12-13)

1. 皆さまおはようございます。今日は秀島先生のご体調のため、私が礼拝を共にいたします。主の豊かなお護りによる先生のご快復を切にお祈り申し上げます。

連日猛暑が続いていますが、来週8月3日は日本キリスト教団が定めた「平和聖日」です。8月は日本の敗戦により先の世界大戦が終了して今年が80年になります。また、人類史上初めて広島・長崎に核爆弾が投下された特別の記憶が刻まれた月でもあります。

このことを覚えつつ、「平和」について主イエスの福音に聴いて参りたいと思います。

2. 世の平和が「神の御心」とは旧約聖書にも無数に記され、特に大預言者のイザヤ書に26、エレミヤ書22回語られています。戦乱に明け暮れるユダヤ人の平和への願いは日常化して挨拶語が「シャローム(あなたに平和があるように)」となっています。さらに、新約聖書では「福音書23+他64の87回」記述があります。主イエスの福音は「平和が中心モチーフ」だと言えますが、しかし世は恒久平和が「成っていない」現状にあります。

一般に「平和」は「戦争が無くて世が安寧であること／安らかに和らぐこと」(広辞苑)と言われます。一方「戦争」とは「武力による国家間の闘争」と(同)。現代の戦争は国家のみでなく「民族や武装集団」の闘いでもあります。先の世界大戦の時の大日本帝国は、「大和民族・皇軍(政治の統制を逸脱した武装集団)」も声高に強調されたのでした。国による戦争では多様な個人々の情感や思考などは「全体(主義)」の下に統制されました。

終戦、8月に思い出される「学徒出陣」の写真は旗(全体を象徴)、銃(武力)、分列行進(集団恣意)、歓送の人々(「国民総動員」「挙国一致」)などの実像を表しています。

1945年11月に出示された「ユネスコ憲章」の前文には「戦争は人の心の中で生まれる」と述べています。日本の国家の平和は「武力による闘い」に負け(敗戦)て成りました。

しかし「国家間の戦闘」は止んだけれど、人々の平和＝「安らかで安寧・和らぎ」は実現したのでしょうか。私自身は4歳で戦後生活を経験しましたが、その後10数年は食べ物、着る物、履物、病気の治療薬、日常用具等々に事欠く困窮、貧乏生活が続きました。多くの人々の「個の生活・人生」は長い間「戦争」を引きずる戦後を生きて抜いて来ました。

3. さて、主イエスがさまざまところで人々に語った「平和」について今日はマタイ福音書10章の「十二使徒を派遣する」場面を熟読し、考えてみたいと思います。

『異邦人の道に行くな・サマリア人の町に入るな』(5節)は『あなたがたを迎え入れず…言葉に耳を傾けようとしない』(14節)地域ではなく、宣教の最初の地は「メシア待望の民＝イスラエルの迷える羊」たちに福音を届けるよう指示されたのだと思います。その宣教の内容、メッセージは『天(神)の国は近づいた』(6節)という福音です。その国とはどういうところか? 近づいたとは実際どの辺りまで、どのように来ているというのか?

まずは宣教に出かけるときの「旅の準備」について、主は『金貨・銀貨・銅貨を入れるな』＝「一文無し」で。また『袋(日用品を入れる「ズタ袋」)も二枚の下着も、履物も杖も持つな』と。履物や杖(日常の危険や障害から身を護る手段)も(マルコは『杖一本持ち…履物は履く』

が『パンは持つな（ルカ福音書も）』と。今の「ホームレス状態」です。

実は、当時の庶民（人口の9割以上）は度重なる戦乱に敗れて最貧の困窮状態にありました。ローマ帝国の占領下、王や神殿貴族なども含めた支配層から加重の税金などを徴収、搾取され、食うや食わずの「その日暮らし」を強いられ、律法を厳守できない『罪人』呼ばわりされていました。その上、病気や障害、感染症などに罹患したら、まさに、社会的には「死」の状態を意味していました。レビ記13章45/46には『重い皮膚病にかかっている患者は衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらなければならない。この症状があるかぎり…その人は独りで宿営の外に住まねばならない』と規定されています。律法によって宗教共同体から排除されていたのです。

主イエスは使徒を庶民の中へ派遣するに際し、人々と同じ生活者として「共に生きる者」と寄り添い「天（神）の国の到来」を宣伝伝え、「心身の安らぎと人々の間に和らぎ」をもたらせることが、主イエスご自身の「平和の福音」なのだと言ったと思います。

4. こうした人々のところで『病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い出』す霊の力を『ただで』（8節）使徒に与えました。『悪霊』とは、その日暮らしの最も弱い立場で苦しむ人々の「生を拒むこと」ではないでしょうか。

戦争がなくても心身が「安らか」で人々が助け合い共生する「和らぎ」が無いならば、主イエスが仰言る『平和があるように』と挨拶する言葉は空しく思われます。「日毎の糧」（主の祈り）に欠けて「今日の希望」を失い「生を諦める」とき、悪霊は勢いを増します。使徒たちは主イエスからいただいた「霊の力」で、人々の生への復活、希望をもたらす働きを『ただで与えなさい』と命じられました。共同体の中で人を活かす働きをする者が、食事を共にする成員であることが許されるのは『当然』だとも（10節）。

（5）いつの世も、どこの地でも、『使徒を迎えず…言葉に耳を傾けない…ふさわしくない者』はいます。主の僕はしかし、気落ちする必要はありません。使徒の願いは世に生きるすべての人に『平和があるように』の挨拶語で、絶対に消えてなくなることはありません。主イエスは『あなたがた（使徒＝僕）に返ってくる』と仰言います。『返ってくる』のほとんどの英語聖書は「remain＝変わらずに残る」と訳しています。受け手が「拒否」しても、主の真理は不変、永遠で『審きの日（15節）』に向け、聴く者の選択に委ねられています。

私たちには『我らが赦すごとく（主の祈り）』と“執り成し”を祈ることが許されています。

（6）『実に、キリストはわたしたちの平和であります』（エペソ書2:14）と使徒パウロは力強く語りかけます。主イエスは人間の“どんな命”も“人として在る”ことを、具体的な御業で示され『一人の新しい人に造り上げて平和を実現』（同15節）すること、人と人の関係、人々と人々の協働社会で『平和』に生きる「霊の力」を与えてくださいました。

憎しみや敵対心で人々の心身を傷つけ、命を奪い、神の創造物を破壊し尽くして人々を困窮化する戦争は、『キリストの平和』に耳を傾けない『悪霊』から生まれるのだと思います。

ユネスコ憲章前文は「人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と述べます。『悪霊を追い払う…キリストの平和』を心のとりでとし、貧窮化する生活者に寄り添う“共に生きる社会”、医療・福祉・外交の礎を築く協働体、教会でありたいと願います。

お祈りいたします。